

## 実践事例

# 伝える力を高めるための弁論文指導

末田 順子

### 一、はじめに

四月になり、新一年生を担当するときに国語は好きかどうかを尋ねてみると、好きだと答える生徒は多い。本を読むことが好きだという生徒もいれば、文章を書くのが好きだという生徒もいる。漢字が得意だと答える生徒もいる。国語は読む、書く、話す聞く、漢字など（言語事項）と日常の言語活動のすべてが学習の領域となる。国語は苦手な人でも、書いたり読んだり、おしゃべりをしたりは当たり前に行っている。

国語を教えているなかで気づいたことだが、意外なことに書くことが苦手だという生徒は比較的少ない。これは冒頭にも述べたように、日常的に行っている活動の一つととらえているからである。その証拠に、何か条件をつけたり、テーマを自分

で探さなければならぬ課題の場合、「書けない」という生徒の声が聞こえてくる。それほど難しいテーマをあたえているわけではない。これは、生徒は表現できることをもっているのに、その表現の方法ややり方がまだ身についていないからだと考えられる。そこで、年に一度取り組んでいる弁論文の指導に注目した。私自身、中学時代に弁論文を書いたことがなかったので、当初は何を書けばいいのかすら全くわからなかった。しかし、自分の意見（主張）を書けばよいことがわかってくと、相手を意識して書くことに重点をおいた指導をしていけばいいことが次第にわかってきた。そこで、相手を説得するための文章の指導を試みることにした。これまで、書くことは得意だという生徒も、自分の感情をストレートに表現することはできるが、使用する語彙は少なく、書いている内容は、自分の感情を羅列したものが多かった。情報の発信が一方的なものに

なっていたのである。

また、弁論文は自分の主張を書かなければならない。新聞に掲載されるような弁論の出来事をすべての生徒が経験しているわけではない。ごく当たり前に日常を過ごしている生徒たちに劇的な出来事がなくとも、弁論文を書くということは、自身自身を振り返るよい機会となる。多くの生徒が高校受験で面接を経験する。ここで求められるのは自分自身の考えや経験を相手に伝えることである。相手に何を伝えたいのかを明確にした授業を行うことが、生徒たちが社会を生き抜く力となると考えている。

## 二、研究の経過

平成二十一年度、学校の研究主題は「特別支援教育の考えを生かしたよりよい集団づくりの研究」であった。

- ・ 個に対する学習指導によって、基礎学力を定着させ、確かな学力に向ける。
- ・ 生徒の学習態度の変化（集中力・忘れ物・遅刻・復習）に対応した授業の工夫をする。
- ・ 一年生の国語、数学、英語でTT、少人数指導を行う。

この目標を踏まえ、国語科ではコミュニケーション能力を高めることを目的として授業を工夫していけないかと考えていた。

言葉を通して相手を理解し、自分の発した言葉が相手にどのように受け取られているのかを生徒自身が自ら体験し、伝わらなかつたらどうすれば伝わるのかを考えながら学び合うことができないかと考えた。意志の疎通ができなければ人間関係を築くことができない。全学年を通して国語科の目標の共通点は「相手意識」であった。

## 三、教材

- 1教材 弁論文 岡山県弁論大会に向けての弁論文
- 2対象 岡山県備前市立備前中学校第三年生生徒

## 四、主題設定の理由

対象となる生徒のうち、国語に対して苦手意識を抱いている生徒は比較的少ない。学習に対しては、意欲的に取り組める生徒が多い。小学校での漢字の反復練習や本校が準会場として実

実施している漢字検定を小学生の時に受検していたこともあり、漢字が得意だから国語は好きだという生徒もいる。また、テストを実施すると、書くことの設問に対しては、無回答率（白紙）が高くなる傾向にある。

学年が進むにつれ、理解しているのに積極的に発表する生徒は激減する。これは、間違えることに対するおそれや自信のなさ、目立ちたくないというプレッシャーが原因だと考えられる。

書くことに抵抗感をもつ生徒は少ない。特に自分の感情をスレートに文字にすることができると。しかし、感情を表すために使用する語彙は少なく（限定的）、書いている内容は、自分の感情だけを羅列したもの、表現や文章のねじれ、根拠や理由にあたる部分が欠落しているものや表記の誤りがあるものが多いと見られる。それぞれの生徒の心の中に思いはあるが、自分の考えを筋道を立てて相手に伝えるための文章として書けない生徒が多い。そこで、たくさんの目標の中から、今回は三年間を通して、相手を説得するための文章を書くことを目標として、弁論文の指導を計画した。

## 五、指導目標・指導計画

平成十八年度から平成二十年までの三年間を見通しての指導計画を立てた。今回の実践は、最終年度の三年生になった生徒たちを対象に行った授業である。

相手を説得する文章を書くために取り入れたのが、根拠のある文章を書くことである。その方法として、三角ロジックを取り入れた。また、書くことが途中でなくなつて投げ出してしまわないために付箋を用意した。これは、KJ法のやり方を用いている。ただし、KJ法を理解して利用できる生徒はいない。テーマに沿った材料を集める段階で、思いついたことを書き出し、連想したり文章構成を組み立てたりするために用いた。

### 一年次

授業目標 初めての弁論大会に向けて、自分でテーマを決め

主張を必ず入れた文章を書く。

授業計画 10時間扱い

### 第一次（1時間）

・ 弁論大会の映像を見て、弁論についてのイメージをもた

せる。

- ・ 弁論発表ができるまでの流れについて知らせる。
- ・ 文章を「はじめ・なか・おわり」の部分に分けて書くことを伝える。

### 第二次（5時間）

- ・ 自分のいいたいことを書き出し、テーマを決めさせる。
- ・ テーマから連想することを付箋に書かせる。
- ・ 付箋を利用して、文章構成を考えさせる。
- ・ B4版のワークシートを用意し、付箋をもとに、文章を書かせる。

- ・ 原稿用紙に文章を書かせる。

### 第三次（4時間）

- ・ 原稿をもとに、発表の練習をさせる。
- ・ 学級弁論大会で発表させる。

## 二年次

授業目標 弁論大会に向けて、自分でテーマを決め、主張に

理由 付けのある文章を書く。

授業計画 11時間扱い

第一次（2時間）

・ 自分の主張に対して理由付け（根拠）があれば、相手を

- 説得できる文章になることを伝える。（資料1）
- ・ 三角ロジックを図示したワークシートを使い、理由付けについて知らせる。（資料2～4）

### 第二次（5時間）

- ・ テーマを決めさせる。
- ・ テーマから連想することを付箋に書かせる。
- ・ 付箋を利用して、文章構成を考えさせる。
- ・ B4版のワークシートに付箋をもとに、文章を書かせる。

- ・ 原稿用紙に文章を書かせる。

### 第三次（4時間）

- ・ 原稿をもとに、発表の練習をさせる。
- ・ 学級弁論大会で発表させる。

## 三年次

授業目標 弁論大会に向けて、相手を説得する文章を書く。

授業計画 9時間扱い

第一次（1時間）

- ・ 弁論文を書くことを伝え、字数の制限を設けることを伝

える。

## 第二次（3時間）

- ・ テーマを決めさせる。
- ・ テーマから連想することを付箋に書かせる。
- ・ 付箋を利用して、文章構成を考えさせる。
- ・ B4版のワークシートに付箋をもとに、文章を書かせる。

## 第三次（5時間）

- ・ 原稿用紙に文章を書かせる。
- ・ 原稿をもとに、発表の練習をさせる（資料5～8参照）。
- ・ 学級弁論大会で発表させる。

## 六、指導の実際

一年生の段階で、弁論文を書いたことのある生徒は皆無である。まず過年度の弁論大会の様子をビデオで見せてイメージをもたせた。テーマをいくつか紹介し、日頃言いたいと思っていることについて、自分の考えを明らかにしていけばよいことを伝えた。この時点で、自分なりにしっかりと主張をもって

いる生徒はほんの少数である。多くの生徒は、環境問題に関するテーマを選ぶ。また、部活動をしたほうがいいかしないほうがいいかなど自分の身近な生活からテーマを決める生徒もいる。言葉の暴力やいじめなど、学校生活の中での問題をテーマにする生徒もいた。テーマが決まると具体的に材料集めをする。そのときに用いたのがKJ法である。付箋を使い、テーマに沿って思いついたことを次々と書いていく、一人あたり4枚ずつ付箋を与えたが、必要な生徒にはどんどん新しい付箋を与えた。付箋で材料集めをしていく段階で、主張は変わらないがテーマが変わっていった生徒もいた。付箋に書き出した内容などのような順番で原稿に書いていくかを付箋を実際に貼り替えながら考えていった。目に見える作業になるので、頭の中だけで推敲するよりもこちらも指導しやすく、生徒が自主的に考えることができる効果的な方法だった。

書く順番が決まったら、B4一枚のワークシートを渡し、箇条書きした付箋の内容を文章でまとめていった。弁論のあらすじ作りである。この時点で、「です」「ます」体で書いていくことを伝え、書き言葉と話し言葉についても説明を加えた。その後、原稿用紙を渡し、弁論文を書かせていった。原稿用紙に書いた内容を繰り返し推敲するように指示する。この段階で生

徒相互に読み合わせ、表現についてのアドバイスをする時間を設ける。原稿にどんな手直しを加えることがよいことだと伝え、どんな原稿用紙に手直しを書き込ませる。手直した原稿を清書させる。清書原稿をもつて、発表練習に入る。この作業を一、二年次に繰り返していた。

三年生にもなると、弁論文を書くことは生徒の中に定着しており、身近な生活の中から弁論文の題材を早くから探し始めている。また、部活動や中学校生活のことを書くにしても、一年生の時に比べて、内容は深まり、自分の主張も重みを増している。付箋を使つての材料集めは一年次よりくり返しているため、やり方も定着しており、スムーズに作業に入ることができるよう。一、二年次では、原稿用紙五枚までで弁論文を書かせていたが、三年次では原稿用紙三枚以内に書くように指示した。これは、二年次までにずいぶん論理的な文章を書くことができるようになっており、三年次では限られた字数の中で自分の意見を明確に書くこと、四分間という弁論発表の制限時間の中で、相手にわかりやすく話すことを狙つたからである。

最初は書く分量が短いと喜んでいた生徒もいたが、自分の言いたいことを原稿用紙三枚以内に収めることが意外と難しいことに気づく生徒もいた。弁論は発表をすることが大きな最終

目標になる。三年次受験を目前にして二期期の半ばに取り組む弁論は、面接練習に向けての絶好の話す機会となる。一、二年次には五枚まで書くことを条件としていた。たくさんの原稿があれば発表四分の制限時間を超えることができる。原稿用紙三枚の弁論文を四分以上で読むようにするためには話し方に工夫をしなければ、普通に読んでいたのではわずかに二分程度で発表を終わってしまうことになる。

発表練習に入った段階で、一クラスを三、四人の小グループに分けて活動をさせた。一クラスが約三十八人だったので、各クラス九、十ずつのグループに分かれた。各グループにストツプウォッチを渡し、まず、一分間で話すスピードについて学習させた。通常、一分間に三百文字程度のスピードで話すのが聞き取りやすいとされているが、弁論発表のためそれよりもっとゆつくり大きな声で発表させるため、二百字程度の文章を一分間で読む練習をグループで学習させた。小さな声での発声ではタイムが伸びないことに気づいた生徒たちは、大きな声で、間をとりながら発言していた。この練習の後に、自分の弁論文を相互に練習をさせた。はじめのうちは四分に満たない生徒も多く、三枚書いていなかった生徒は必死になって文章を書き加えていた。また、早口になったり間がとれなかったりする生徒

も、級友からのアドバイスを聞き、グループ全員が四分という目標を達成できるように取り組んでいた。実際に話し言葉にしてみると言いにくい箇所が出てきて自ら文章を手直しする姿も見られた。この作業で語彙を増やしていった生徒もいた。

声の大きさについての指導は、ネスミの声、ネコの声、ライオンの声と三段階に分けて、クラスの前で弁論文の題名を自分の名前を発表することで評価した。クラス全体に聞こえる声で話すことを目標とした。

## 七、実践の成果と課題

### 〈成果〉

・三年間を通しての実践の中で、三角ロジックを取り入れると相手意識をもって文章を書くことができるようになったと感じる生徒が増えた。

・お互いの原稿を読み合う活動を取り入れたが、話し合いができるグループは改善点を指摘しあうことができていた。  
・学年が進むにつれ、自分で文章を推敲し、不適切な表現に對して違和感をもつことができるようになった生徒もいる。

### 〈課題〉

・日常生活の中から題材を見つけることが難しい生徒への手立て。

・抽象的概念や時系列の文章を書くことが苦手な生徒への支援。

・発表ができる雰囲気づくり。

説得力のある文章を書くためには、相手（読み手）を意識することが必要である。相手を意識するためには、推敲の段階で納得できるかどうかを生徒同士が互いに読み合うグループ学習を取り入れることが必要だと感じた。文のねじれについては、繰り返し指導することで、指摘をしなくても生徒自身が気づくことができるようになっていった。根気強く指導していくことが必要だと感じた。

課題の克服に向けて、日常生活の中で経験に乏しいと感じている生徒には、対話をしていくなかで題材を引き出すことが必要だと感じた。この実践をした翌年には一年生の国語の授業で少人数指導が可能だった。少人数にすると一人の教員に対して二十人弱の生徒で授業が行える。題材が見つからない生徒に

は、対話をしながら題材探しを行うことができた。

また、抽象的概念や時系列での整理が困難な生徒には一つずつ具体的なできごとを付箋に書き出すように指示を出した。支援学級の生徒などへの指導も考えたと書く過程で人と話すというのは重要な作業のように思える。

発表がしやすい雰囲気づくりは、どのような場面においても必要なことである。これは国語の授業だけではなかなか作り出せない場合も多い。この課題に対しては、次年度、学年全体でソーシャルスキルトレーニングを積極的に取り入れ、人間関係づくりに努めた。人間関係を築くのが苦手な生徒や相手の立場になって考えることができにくい生徒もいる。このような中で、よりよい集団生活をつくっていくことができれば、相手意識をもった国語の授業展開はしやすくなり、協同学習（生徒相互による学習）が可能となる。

今回の実践を振り返って思うことは、具体的な手立てと目標があれば、生徒たちが相互に学び合えるということである。教師が一生懸命教えているつもりで、実は生徒から教えられることが多い。私自身、はじめは弁論文指導は面倒でいやだった。何を指導すればいいのかもわからず、ただ「書け」というだけの指導だったと反省している。それが、何を目標にすればよい

かを自分の中で明確にし、生徒に提示することによって、生徒も意欲的に書き始めるようになった。コミュニケーション能力の低下が危惧されている時代の中で、相手に伝える力を身につけるための授業づくりが重要であると考えている。

#### 【参考資料】

次頁掲載

ザ・并論 ①

読解力のある文章とは？

( ) 組 ( ) 番 (氏名) ( )

\* 次の文章を読み比べてみましょう。読解力があるのはどちらの文章でしょうか。その理由も書き添えてみましょう。

**A**

私は今携帯電話が必要です。友達は今携帯電話を持っていて、楽しそうです。携帯電話があれば、友達とメールのやりとりができたり、インターネットやゲームができたりします。大人はみんな携帯電話を持っているのに、中学生だからだめというのは不公平です。だから、携帯電話を買ってほしいです。

**B**

私は今携帯電話が必要としていません。それは、塾の終わる時間が遅いため、帰る道が不安だからです。近頃、学校でも不審な情報や噂を聞くことが多くなっています。携帯電話があれば、万が一の場面にすぐ警察や家の人に連絡をとることができる。最近では公衆電話が減ってしまっているから、携帯電話を買ってほしいです。

\* どちらが読解力がありますか。

\* なぜ、そう思いますか。

ザ・并論 ②

レッツ・トライ・三角ロジック

( ) 組 ( ) 番 (氏名) ( )

【練習2】 次の文は、**事実**・**理由づけ**・**主張**のどれでしょうか。また、足りない文を書き足しましょう。

1 A 彼は二百字帳に向きを置いている。 \_\_\_\_\_  
 B 二百字帳は漢字練習の時に使うものだ。 \_\_\_\_\_  
 C \_\_\_\_\_

2 A ナマズが泳げないのは地味魚の形だからと書かれている。 \_\_\_\_\_  
 B たぶん地味魚だからだろう。 \_\_\_\_\_  
 C \_\_\_\_\_

3 A 少年が「オオカミがきた！」と叫んだ。 \_\_\_\_\_  
 B オオカミはきいていないに違いない。 \_\_\_\_\_  
 C \_\_\_\_\_

4 A 少年が「オオカミがきた！」と叫んだ。 \_\_\_\_\_  
 B オオカミは本所にきているだろう。 \_\_\_\_\_  
 C \_\_\_\_\_

\* 3と4を比較して、気が付いたことはありますか？

\_\_\_\_\_ は同じなのに、 \_\_\_\_\_ はまったく違っている。

→ \_\_\_\_\_ によって主張が変わってくる！ 

ザ・并論 ③

三角ロジックとは？

( ) 組 ( ) 番 (氏名) ( )

★ 三角ロジック \_\_\_\_\_



少年はフロッピーで遊んでるらしい。

↓

その事実が、どうしてその主張に結びつくかわからない理由。

**理由づけ**

**事実**  
少年が「オオカミがきた」と叫んだ。  
主張の元となる 具体的な事実 (実際にあったことや本場のこと・真実)

↓

**主張**  
オオカミはきいていないに違いない。  
興味のない事実から 推して導かれた 意見・推察・推定など (→だから、～に違いない)

【練習1】 次の3つの文は、**事実**・**理由づけ**・**主張**のどれでしょうか。

1 A 山田さんは目が赤けている。 \_\_\_\_\_  
 B 靴力が悪いのは靴が合っていないから。 \_\_\_\_\_  
 C 山田さんは靴力が悪いのだらう。 \_\_\_\_\_

2 A 人はやめしにことがあると目を合わせられぬに気がしない。 \_\_\_\_\_  
 B 彼ははこうきをつけているに違いない。 \_\_\_\_\_  
 C 彼ははと目を合わせたいに基している。 \_\_\_\_\_

ザ・井藤 ③

### マスター三角ロジック

( ) (組) ( ) (番 氏 名) ( )

▼ 次の意見文を読んで、「主張・事実・理由づけ」を考えましょう。

私は、生活するなら郊外よりも都会がいいと思います。その理由は次の二点です。まず、都会は便利だということです。都会には、様々な施設やお店が揃っています。必要な本を探すと、すぐ近くに図書館があります。本屋さんもそろっています。着るものもそうです。都会の大きなお店にはたくさんさんのデザインの手帳がそろっていて、いつでも好きな服が手に入ります。郊外では、何かほしいものがあったら都会まで足を運ばなければ手に入らないでしょう。

もう一つは、都会には、生活する上でとても大切ないろいろな人と交流があるということです。都会ではたくさんの人と出会えます。都会にはいろいろな人が集まっています。学校だけを考えても、都会の学校は生徒数多く、クラスの間も広く感じます。しかし、郊外の学校は、子どもの数が減っていて、「学年一クラス」しかも教人の学級というところもあるそうです。どんなに多くの友達をつくらうとしても、これでは無理があります。また、都会では塾や習い事、遊びの中で他の学校や大人の人、林園の人とも交流がもてます。

以上二点から、私は、生活するなら郊外よりも都会がいいと考えます。

ザ・井藤 ④

### ゆっくいはっきり抑揚をつけて話そう

( ) (組) ( ) (番 氏 名) ( )

■練習その1 2分で読んでみよう。

2分で読みましたか？ できた ・ できなかった

では、どのくらいでしたか？  分  秒

■練習その2 隔で順番に読んでタイムを計ってみよう。

題 名	タイム	よかったところ・アポイント

自分のタイム

1回目  分  秒

2回目  分  秒

＜授業の感想・反省＞

ザ・井藤 ⑤

### 声の大きさと速さ

( ) (組) ( ) (番 氏 名) ( )

1 声の大きさ

● 声の出し方の順番で音で十分loudと聞こえる大きさ。  
 ● 静かにしていれば後ののはしる順番で十分loudと聞こえる大きさ。  
 ● 静かにしていれば聞き取りにくいところがある大きさ。

★あなたの声の大きさは？

2 話す速さ (原稿用紙1枚)

● 1分以内  
 ● 30秒以内  
 ● 1分以内

3 筆数を数えるポイント

①

②

③

・ 声の大きさや速さは適当か？ 原稿用紙1枚を約  分で



ザ・弁論部

### 5分で原稿を発表しよう

( )組 ( )番 氏名 ( )

★主語は、原稿を見直そう。

- ・ 数字や敬語はあまり使えないか?
- ・ 文のねじれはありますか?
- ・ 強調するところやゆっくりに読手とこちらに注目を向けたり顔を引いたりしよう。

★練習 紙で原稿に読んでタイムを計ってみよう。

姓 名	タイム	よかったところ・アドバイス

自分のタイム

1回目 分 秒

2回目 分 秒

<授業の感想・反省>

目標

反省

氏 名	時 間	コメン

★ 弁論の制限時間 五分

★ A 四分～五分 B 三分～四分 C 三分以下

★ 大きな声でハキハキ話す。

★ 「」や強調したい部分の前で間をあける。

★ 会話などは、感情を込めて話す。

★ 原稿はなるべく暗記する。

○ **原稿に注意書きをしよう。**

弁論大会に向けて **分かりやすく話す**

( ) ( )組 ( )番 氏名 ( )

(すえだ じゅんこ) 岡山市立操山中学校教諭